

立ち会う機会が減っている。そんな中、在宅医療を推進する三重県四日市市にある「いしが在宅ケアクリニック」の石賀丈士院長(四〇)の写真は、肉親の最期をみとることを、患者の孫ら幼少の親族にも勧めている。「命の大切さを経験を通じて実感するのは、人生の大きな糧になる」と呼び掛ける。(佐橋大)

「みんな来てくれて良かったなあ」。石賀さんが、ベッドを取り囲む五人の女の子たちにはほほ笑みかけた。五人は、九月二日にがんのため七十一歳で亡くなった三重県いなべ市の伊藤和樹さんの孫とめいだ。孫四人は、伊藤さんの病状が悪化した知らせを聞き、カナダやインドネシアから母親と一緒に戻っていた。

伊藤さんは八月下旬、ホスピスへの転院を考え、入院先から退院。当面の在宅医療のために、クリニックを紹介された。石賀さんは、痛みを抑えるため毎日、伊藤さん宅を訪問。亡くなる前日、家族に死期が近いことを告げた。

孫たちは祖父の口をぬぐったり、腕や脚をさすったり。やがて、呼吸が弱くなったことに妻の恵美子さん(六〇)が気付き、皆が枕元に集まった。

「お父さん」「おじいちゃん」。娘や孫たちが真剣

みじかの場に



伊藤さんを囲む孫ら「三重県いなべ市で(いしが在宅ケアクリニック提供)」



肉親の死から「命」学ぶ

れた時間を過ごす。「日本では病院で八割近くの人死が死ぬようになり、死が遠くなった。若い世代にも身近な人の死に立ち会い、死を身近に思う経験をしてほしい」と石賀さんは話す。

病院で呼吸や心臓が停止すると、ほとんどの場合、救命措置が講じられる。そのため、最期を家族が静かに見守ることは難しい。また、さまざまな治療が講じられる病院では、死が訪れるそのときを予期しにくく、臨終前に家族や親族が集まりにくい。

石賀さんはこう感じる。自宅に死亡する肉親を見守ったことがある人が減った。その結果、家でみとることへの恐怖感が増し、病院への搬送が増える。そんな悪循環に陥っている。さらに、人の死が遠のいたことで、命の大切さも分かりにくくなっている。

終末期を在宅で過ごす場合、経験を積んだ医師は次に起きることが予測できる。それを聞いて、家族も

んは「幼いうちに少しでも触れておけば、大人になって家族をみとるときに、その記憶が生きるはず」と話す。

活動を支えるのは自身の二つの体験だ。幼いころから大阪府の自宅と一緒に暮らした祖母は、認知症を患っていたがずっと住み慣れた家で過ごした。亡くなる前日まで普通に「飯を食べ、苦しまず、眠っている間に亡くなった。石賀さんの大学受験前だった。「人間こんなに楽に死ねるのか」と思った。

一方、学生時代の実習では、入院してさまざまな治療で延命されることで、苦しむ時間も長くなった患者とも接した。「自宅で、最期まで暮らせる医療を」と考え、在宅医療を志した。

訪問先には終末期の人もいるが、笑顔があふれ、悲壮感は少ない。「死はショックが強いことだからと、子どもを遠ざける医師もいる。しかし、幼少のころに命の大切さを学ぶのは何にも替えがたい経験。在宅医療は、命の教育の場でもあるんです」

三重・四日市の在宅医が提唱

に見守る中、伊藤さんは息を引き取った。孫の尚美さん(八)と一緒に帰国していた次女の愛子さん(四)は「父の最期に娘と一緒に立

ち会えて良かった。きつと命を無駄にしない子になると思う」と話した。

百件の在宅みとりに関わる。このうち、石賀さん自身が関わるのは約四分の一。そのうちの三割ほどで、患者は幼児から大学生くらい

つなごう

医療

299

中部の

最前線